枝桑抄集

一

十四下

伊地知文庫
文庫20
360
17

文庫20
360
17

扶桑拾葉集巻第十四下

目録

ひの記系の日記　藤原宣基
雲井の人丸　同
愚問賢注序　同
都のたより　同
雲井の雫　同
白鷹記　同
ひとの袖きめ　同

人麿の歌の初
藻波集序

同

同

扶桑拾葉集巻第十四下

参議従三位兼行右近衛権中将源朝臣光圀編集

拾葉乃月記

伊達家文庫

菅原良基

奈良の京遷り給ひし時、ひかのうまの子日去給ひて、
ひかの御子の為に、春日の三笠山と申す所にて、
小野の篁、かの所を尋ぬるに、
奈良の都の若草の新御殿に、ひかの御子を
移し奉りしの文、所柳新もわらせ給
へし、神にも祭り給へ、御山の梅の月、
しむ雲にて、林の下草、苔の庵の

都まてに七年と成られかしかしかの
はたて世の中に人多くわたりて人の者ともとらはう
しるに心有さまにいと世をうやまて歌らはし
以ひ天道よりうわい文日も臭しかに頭六宗殿の
庭もに門をたりとしかく成ぬ城ぬ霊験
かりしるや大方神もれ御ひて人々さらとぬ
侍とを公武日御神に心ちやうとて野沢行て
かとに法華かはられ宗に昔より神をもうもいめ
もの法華ぬ板ぬしかいもをぬしかるやぶれい
徳信ぬ大景寺の法華堂所と物をしもてまつると
作られしよ世の龍宣ひて不思議のはかりなし

ひとしやいまにも弟子かくして真言を行ひるとも
今いかるる身ひとりんをんもあや世法人へいり侍ぬ道
朝禅門を今日ひかるるへしとも思へしを侍
ぬや心ものとて加ぬ新しいはいやと
世うるよりたたひのいもしらやそ
れわれ侍ぬ心者し老の板ぬ
りに長講堂へ申てもあしをあてきい
れをいつをもしに法華ぬ張乃すまあ
申社ぬ心ぬ侍ぬ心ぬ
とそ申古事ひうかと
まぬのらの板ぬ恵草生ぬて

[illegible]
彼野宮の[illegible]の物うかもし。かくをそ。[illegible]
[illegible]
[illegible]

義陸ゝ・今日し所をめ給・こ沙
ある人いとゝ・之卿長房をして裝束ゝ
ゝ・雲ゐ仏ゝて雨の沙ゝ・由ゝ神事
ゝ・辰の刻ゝ南書年殿房・寺
へ入て申ゝ七ゝ・神人家定やゝ集て・六條
殿の庭ゝ・六七町ゝ引ゝ・之の刻ゝ指ゝ
懐雅指僧正ゝ・ゝて・僧綱三四人ゝ入て東の庭ゝ
小ゝ方ゝ・殿・殿・東ゝ方ゝ立ゝ・之ゝ時
ゝ・ゝ関白殿参給・神司ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・光堂上ゝ・ゝ・殿房ゝ
ゝ・ゝ・大宗院僧都房ゝ

ゝ人ゝ・ゝ・ゝ・左大臣殿九条殿一條
大納言殿・別當ゝ・ゝ・ゝ東ゝ庭ゝ南ゝ方ゝ
ゝ・ゝ・ゝ関白殿ゝ・ゝ
良の僧綱ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
長者の孫ゝ・大臣ゝ・ゝ
柄ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
司職ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・大宗院ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ

威光より行幸あり。胡床を設け、武運長久の祈願也。三献
一同に三献楽人、北の方より出て、神人
数百人来て、先布奄と申し、布奄の神寶
衆のうへとかたりし。関白以下の人々庭の前なる
もを面々に、布奄をうけ、をせて後、和社の幕五本乃
出、神楽をせり。神人も同じく舞。時楽人
還御楽を奏す。敬白舞のうへ、かうし、関白以下編
まて、音と地ゆ出て手伏す。中門の辺より出て、
和の拍子、庭を出る。次神人神楽をする。次
舞人出て、楽成奏して
退出。

先赤仕丁二列より数十人、鳥杖を立て、次白衣の
神人数百人、榊の枝を持。次布奄の大明神の神寶。
神人数百人、次黄衣の神人数百人、次
御正神神宝、次黄色、次赤色、次
まいり。神人数百人、楽人、楽成奏して
退出。次関白殿、柳の御所衣、緑袴、隨身
十人、四位、六位、神祇官、殿上人
二人、六位、袴、布衣、殿上人四人、次右大臣
殿、侍従長殿、上人一人、右馬頭二人、次今出川大納言、
次花山院大納言、烏帽子、次九条大
納言殿、一條大納言殿、次坊城中納言、次四條中納言、次別当。

仙の事かゝる供の皮人かあまたあるなかに次西園寺
中納言・次四条宰相中将・次摂政殿上人・
忠雅右大臣・関白殿御袴・とゝ・季村新大納言殿の御供
四ツ・親忠右大臣・関白殿の御供・宣方資康・仲光・宗頼
・為有・重時・九条大納言殿・次堂上・次聖信・次檜皮
・僧綱・大宗院・僧都・次房・山門・寺門・僧綱・
・そなたゝ・次庶流三位・殿・次連・元服・
・・・

都のうちの名所のみなもとなり。額よりの
あり。京のまなかと記すかの今日は物まうで。時の
関白大臣殿の。御ぐしに大路をとりて。ぐしをおろし
給へる。いとけうとくなりぬ。されど院の御ぐしに
なりて。いとはるばるしく。御ぐしをおろし給へる。時年六條わたり
摂政と聞て。左右なく。はるばるしく。人々しくなりぬ。
うし。物のうへ。あるかたちして。いつくしく。見えたまへる。
今日御ぐしに参り給へる。武蔵の国の住人。
あのうへ。法師なれども。武蔵の国の住人。
なり。御のうへ。法師なれども。
法師。法華経をよむ。数の多く。
数々参りたる。いとたうとくして。後の方よりも。

法師。うち九十ばかりなる。
又青蓮寺とにやありけん。法師の。色も年の
まさりたる。物語。法師。
あるべきもの。寺社の。
うに。法師。みちのくの。
僧。祇。式。春日大明神の。
なる。なを。
武蔵。国の。
春日大明神。式。住吉。帝王。人臣。
なを。八幡。
天皇。
王。
後。神。
武。

伊勢春日の御社なとに所しるし。昔天上より高皇
産靈尊とゝ神・わたつみ神に國をゆつりたまへ
ばなり。此天上にて第一とかゝる也。主神天照
大神の御孫・皇孫を國にくだしたまひしに。此御子の
國へ天くだりせばいかゝ。國土の天照大神と。生所の天上より國
をゆつりたまへば。此御子の神は三種の寶と授ケたまふ。八咫鏡
草薙劍
八坂瓊曲玉
此三種と授
ケたまふ。天児屋根命と副奉て。筑紫の日向の國高
千穂峯に天くだりなり。此天児屋根命と神〻
の御ものゝ。生所の日向の國高
千穂峯に天くだりなり。此御子の海のうへ。
地のうへ。天の原を神慮〻誓てのゝ海し〻我
子孫は代〻
國柄を治ゝ。殿と宮殿と等しく。敬を國とし神
殿は代〻
御位は天皇と雲と同歟。
神殿と寺と
神位は
三殿とてわたつみ・桃柄殿の御先祖なり。
代は未だ
伊勢大神宮の皇孫なる人は
位は即帝は一度しかし又長日は神孫なる人の。執
柄は
てい位と。唐國よりいなかる。長也。主位は即位なり。今も
蒙古帝位はつゝかもの

治のしるしに遠年の間、地しんとうとうとなり、しかし神国の奥旦奥左衛門りわたしめるみ給、不思議乱反とて、退めゆるし給よ、去日大日神の御神ゆえ、諸人左府殿永ゆ寶劔西海ゆ流て後、波浪ゆ打やきの武の御守と成て、国刑敵と去りめるし、光治兼四年ゆ、義兵とゆきるしきゆみ、神宮ゆれ厨と成り、平将軍武威統のため、大和国一国を、乃ち地以て奉に上げて、去日社ゆ寄進きるし、まん神代の事成わ、ゆ、行末とうみらるし、八幡ゆ去日ゆ、正面の頭ゆ出るうんとらい給て、ら、ゆ、と去りめらるん

人々を、行末ゆ成くもうゆ、大方世人ゆ、乃ち国ゆ、中ゆ中ゆとよるし、懐人ゆ、いるし給ゆ、人の、我名利と先と、ゆ、ゆ、人と先として已と後ゆ、行志保ゆうんゆ、立ゆ国ゆ、世ゆ、我ゆ悪しゆ、ゆ、ゆうに、世ゆ、ゆ、人し仏の出世ゆ給て法流生成ゆうし、ゆ、行し、国事ゆ、ゆ、ゆ、我城度の後、蘭浮提の大神と、ゆ、廣ゆ、衆生と導く、ゆ、と、経文ゆ、ゆ、ゆ、

日とにうつりし。この住吉の神の神恵ようあり
天下をも革創し給ふもやと。おとこいのもとにして。
不思議なりと。ふかくしたがひ。老人相対して
うちなげきて。なほ。神人の難
とうしいの考し。うちうちかしせしふらふ
くなげくして。なほ。富士のうつくし
けれ

雲井の月乃見

同

かしこ山陰より年経る古屋にのこる人の身哉
うつして。住ものは花の宮古をこれまきんも。いとんうち
ぬし。鹿の杖をもつて。かくくしこし時月の出る時。涙
流過ぬ。去るあらうのうのうの

く、絶てふる事なり、四くゝ九重の御門のまへ
にて、例の事の彦と言て、都のうち
ゆきもしること、内裏へ参ぬ
はしる、新のわんへとも、百姓とゝまぬ所々、
のゝみきゆかるゝを四んとて、くらゝよりのぼり
う笑いとうなりて、こゝにて内裏へ参
はしるあり、御門陣の門のうへ人へとく、乗をゝまして
きて、ゆくゝる馬車、道もなりのぬるあるうるしい
御車をゝ、うゝへの人々尋はしゝ、四院は七週
まで、大きなる仏事をゝ、ゆくゝ、ゝはうゝ、今日
正月九日なり、仏殿まで法華懺法、七とこゝ也

うゝ、なり、仏白何院の御ゝゝゝ、保元の法ゝ
仏法をゝ、ゆくゝ、仁寿殿まで、七日御懺法、
うゝ、中宮世の帝、ゝゝ、しゝ法ゝ、建武
のゝ、年、二年の彼岸、ゝゝ、ゝ、
院又無年、寛慈院の左大臣の仏事、四日
ゝゝ、法ゝ、ゝ、
の使、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、
彼鶴の山鶴のゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、

[illegible]
[illegible]
一樹の陰の契り、世世より知ぬ事なれば、[illegible]
[illegible]
[illegible]

人々こゝろうしこゝろて、いろ〳〵入まゐる所、いとむさくしかし。
御母衣の刑部の色目、ふとにくらかやうみ、正年の御をは
ゝ〳〵ふとい、まゐ、通盛の大将かとゝのゝ、仏殿
ゐる田ゝ〳〵そ、ゐ、ゝ、その奥ゝゝる如房、基
盤所ゝ〳〵まて、このをて入まゐ所、内といへゐ、ゐ
し、いとゆゝしくゝをかしかりまて、侍し、淮后ゝをゝく
まゐ〳〵ゝゐまゐて、人々ゐ、ゐ、ゐ、

さしらるゝ中こゝ人〳〵数多さし先ゝ〳〵ぬゝや・長憲法
長重法ゝ・房長法ゝ・長壽法ゝ・教周法ゝ・教心
法ゝ・教日法ゝ・堂上の乃人〳〵・師前大納言さゝ初と
とのゝ・笛今出川大納言さゝ初ねとのゝ・笛・武部ゝのゝ笛
のゝ・笛室町前宰相公房・笛室町宰相中將さゝ初ゝ
のゝ・笛園子宰相さゝ・みつのゝ・笛・公清の宿のゝ
ものゝ・笛・冷泉三位さゝ・野中將ちゝ・笛
の・胡・笛・山科少將教冬・胡・笛・同新少將のゝ・胡
の・胡・笛・楊梅の少將ゝ・篠・笛・笙・地下の乃・宰ゝ・笛
秀・秋・豐原房・秋・同・盤・秋・同・統・秋・同・武・秋・篳篥
・公信・季村・同・季・英・笛・大神・景長・同・景房・れゝく

景秀・鞨鼓・景・絶・太鼓・豐原・秋・篳ゝ・笙ゝ
・篳篥の・房・今・參の・房・人〳〵・若・座の・後・以中・將ちゝ
・笛・胡・胡・胡

の皇と成給ふ・良秀僧都・教尋僧都の
まへ左兵衛佐宣光・次ゝ採花の乱舞の乱舞・次ゝ
伽陀とうたふ・いとたうとし・次ゝ
次ゝ又伽陀・次ゝ調子・良憲僧正礼盤ゝの・
三寶礼・萬秋樂の序・敬礼・淮后・
大將殿以下御礼拜・次ゝ又樂・万秋乱の破・
ゑんいうゝ樂・伽陀・
かゝる破急・白柱・
しもつに・海の樂・輪臺・青海波・
次ゝ伽陀・次ゝ行道・淮后・
以ゝ・主上御門（さけイ）亜衣・鄰の少・

かゝる所にしたがひ・
うこ御教・
いとうとしを・
細言別當・
みの皇・時の・
ゆめ・
佐ん・
ゆもゆまし・又・
千秋樂・伽陀・
うゝ・
殿・
殿・
竹林樂・同・
いゝ・
ぬ・
の・
の・
の

ふゝ〜笑ひて、夜に入りてをとゝ日のぎぬ、典侍内侍色
紙のうへにも、みなれの梅樹の花、春ゆ、雪井の御しるし、
の〜雪井の御しるし、たゝ人の国のうゑてまるゝ、ほゝめて
ゆ〜おもしろし〜、夜に入りてをとゝ日の御ものいみ
ありて、ことなし、この殿うちわ
ゝしい色ゝ、ゆ〜しく、又、内のとゝ家ゝ道の
ゝ殿の義の国とうとゝ、古
国之時日今日第二月也、とゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
かゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

[illegible]・[illegible]・[illegible]・

堂上堂下の衆人初日より同し。但仰今出河の大納言殿
より。大炊御門中納言藤原朝臣
右加賀の右。今参りの局三人なり。はてしなき大法師
のしるに服色さまざまにかしこまりて。うるさのやうに
ものしとうへよりうつして。南殿より桜の
きるに。春宮位の御事。行幸の義種々のいとなみ
かぎりなくて。門前より若宮堂とめりて。
海内かぎりなくと記をめしたるもちて。狂夜盗かたらふ
しるや。山陵奉行武蔵守の名ばかりなる人よりて。かぶらに
かぶらやかめしるいとめてめ。花人かんし
ゆかるよ。将軍も来ん。からかしかしかし。

いとも懇法かり。僧侶三人衆人かぎりて。うるはしき御
簾より。夜とてしるさるの花すり。主上御簡
大打敷筆をかけたる。雲井と記うしも。
耳とはかりなりとて。又上御簡
きへ遣されあり。
同二日夜より入りてしるまる。行道出御ハかり。皇后
右大打敷小下めらしたる。数花の役人。ちり雅楽
つる童舞。公仲卿。教を教。資忠資義
すきうり。重光かり。ちはしる常の御所よりて。うるの
御酒宴。のうしかん。夜のをそそ大打敷とかり
せたる。

同四日第六日より今日迄無なく毎日の殿上
人ならび雅朝臣つぼ重野臣以下の人々
同音きこえ給ひ・こに詞書ひ・こに詞書
大將殿糸せめゆゆしく・先常の御所よりく・例の御嘉
めひ・めくる・りふい大將殿花ひ・をもて出給ふ
金張の弓ひ・その弓ひ・二三百段・ふてとしたし
及ぶまでに花・うすひ・とたてしたみしの器よと
らる・昔ならいまこうの花ひとゆ・ひ・ひなりは
應安ゆい・張の烟くゆ見ひ・及ばず・建武ふいを
り花ひ・ひ・花ひ・ひよく・百車をたくり・いろの
この・かしらとゆ・中宮御ひ・のをのうをの殿・糸

とうしたしひ・ひ・ひ・ひ・一統の間ひ・て・ひ・ひ・ひ・ひ
ひこかひの花ひ・ひ・ひ・ひ・及ばず・ひとをとを
ひ・ひ・ひ・ひ・

後中納言の所ハ[illegible]和の[illegible]朝臣・刑部の[illegible]
[illegible]・長宣法[illegible]
浮法[illegible]
[illegible]
[illegible]

河ゝをいとうるさきなれば・たゝ後ゝ・なを敵と人なとい花
籠ゝ折て来るを・折ゝ〳〵に御ぬきんでられ給へとて・
ゝ海をうの御願・七日こと少かゝ結給きしぬる年・
いと先ゝ・山もいとむとゝ・京大将殿の上れ行ゝ
にてありしほとゝや・ゝ紀の御幡ゝ行ゝいとの
おなじ所ゝ・同おなじ所ゝ・ゝ紀
うちゝの御酒の肴のそいかとあるしまし給れ
ゝを・清ゝをあなたゝ行ゝ・ゝそも宸筆の御八
講の〳〵・きまゝく・南都〳〵御ら行ゝ・ゝ所法
ゝく・信堅ゝいよ武の公卿と拝命し歌詠ゝ
及歌・美姫の名ゝ〳〵ゝ・ゝとゝ行ゝ・ゝ

淮后ゝ・ゝめゝ行ゝ・ゝや・大方春日の御神ハ・法相
擁護のゝ・三笠山ゝ迹とゝ・折ゝ・春日の
ゝふんゝの〳〵宗とすゝ・武のゝ・
ゝ神ゝ・ゝ〳〵ゝ・ゝ〳〵ゝ・ゝ
ゝ紀ゝ・ゝ〳〵ゝ・ゝ法
ゝゝ・ゝ世のゝ宗のゝ
同六日ゝ大将殿供御ゝ・ゝ行ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
笛ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ

[illegible]・十とも[illegible]れ侍[illegible]
御わらこはかりよて侍御ハ[illegible]
寮の[illegible]ん[illegible]
さ[illegible]
[illegible]て・今[illegible]
[illegible]
[illegible]

花を折り、月を待つ。この心を尽くして大将殿出仕せられ、まづ第一の一遇とかや。かくて年一日二日を待ち、武蔵守の家やつこれ数寄して、去れば花の雪とおぼしめし、姫君紅葉の錦とうらめしがらるる。

仏の御ことのとて代々の帝も行幸なし、いうもおろかなりとぞ申すまでなし。

さて後、美しき神仏の志、花にもまさるいのちを、人のかたがたまでと、かこちきるはうの安産、浅ましう思ひ知らるべしとぞ。

墨問賢注序

同

学問と歌の道、人ごとに似て志深き。世挙て深き道を学ぶ。まづ、桂林の一枝とも攀じ、崑山の片玉とも拾ひ、琴華の角弦を弾じ、古賢の趣向を語り、風雅の遺云を求めて、愛に好ましきあり。七自有餘の遐筭に係て、三十一字の奥旨に入り、久しく橋本の上を志して、梅うぐひす山道の玉道を尋ね、去りし宴の方花の宿を偲び、過して、去る年の城をとどめ、むかし、杉山の月の下に吟嘯して、姫光の面を思ひ、かはるとを

[illegible]・遣次[illegible]・[illegible]師[illegible]わすれを道[illegible]
業・[illegible]よりみきたとふ[illegible]しかく・[illegible]を[illegible]人・[illegible]を[illegible]
きたといふこゝろ・憐[illegible]年の知己かう一通の先達・
法道よ宴と開[illegible]・金[illegible]のまゝ[illegible]とし・蓑海
よいとこゝろ[illegible]日八・[illegible]法[illegible]の盟とわすれと・冠とゝを
卯とゝ[illegible]のゝ[illegible]・[illegible]ゝ[illegible]・[illegible]
[illegible]と・[illegible]・[illegible]・[illegible]の遊[illegible]とむ[illegible]の[illegible]と話
[illegible]・一日宗[illegible]の餘・[illegible]ヶ篇[illegible]と・[illegible]の道
[illegible]と[illegible]・[illegible]の批判と作[illegible]・[illegible]
[illegible]・[illegible]の用[illegible]・[illegible]稚児の蒙と擊[illegible]

都の法[illegible]

[illegible]宗久と[illegible]・[illegible]と一枝の花[illegible]・[illegible]
八雲の風[illegible]・[illegible]
[illegible]・[illegible]・[illegible]・[illegible]
[illegible]・[illegible]・[illegible]・[illegible]
[illegible]・[illegible]・

すみ染の袖の中よりは、ちらしかへしたる紙とは
かくれ、むしろの片えのかたまりは、又うかぶ雲
とぞ見へ侍りける。剡溪の曉の雪とのみ思ひ
なし、十仁の夜を見ていと花こそかくはかくこそ
有無の夜の雨とぞ思ひ侍りしも、流水のうれしく
うるおひて、ちりぬきしとのをとづれ、鶯
のはつね、大江山いく野の道とわけすぎぬる
らん。みちのくにかよふ海の涯よりかへりまて、若の浦
野山の末よりは、思ひの露とのうるをとこそ、なきけれ
はるを木の花よりは、ちりぬるかぜにつけて、この花
しの松よりはかつをと、都のたつみをなる、海こ

ろも、をちかるこそいのちとはいへども、なをう
ふと侍るをとくとも、なをはるかなるはるをまちきん。あらまほしき嘆
嘆のいきをよ、雲人は、いまをうつ花、蕊乃ちる葉を
侍るとかの事

竜門乃花

聖人いづるときは、詩三百よりはまなびんこと、花を
へと、ちるかをかをもかるせのこゝろ、海すくりて、月をみ
みるかるる世のこゝろ、ひかりをみていたるとこゝ、
らしとしまきかくのこと、改義乃邪正は
あ〜、王道の興慶とし、ぶかみちるかり、なかく、の

同

代々の御門、春の宴の月の夜、秋の月の夜、
つゝ、歌とゝ、詩作、管弦、
とゝ、書、しめ、けるも、神國の風俗なり、佛
道の教、とゝ、ものまね、聖代の教誡也、京洛の人の
ものしとゝ、この花をしらん、あるゝ中殿の宴、
はるゝ、清涼殿、大喜四年四月、畫の橘
花と感、ゝ、大納言師房卿、左大臣、より和して、新
感撰、ゝ、歌、ゝ、歌せしめ、清涼殿、中殿、紫宸殿、
ゝて、御製、ゝ、後、ゝ、絲竹の宴、ゝ、
ゝ、白河院、應德元年三月、左大辨、匡房、和して、
花、賞、春、ゝ、歌、ゝ、
ゝ、中殿、ゝて、海、ら

祇園、又、白河院、永長元年三月、擬中納言、匡房卿、
和して、花、賞、春、ゝ、歌、ゝ、宸宴、
のゝ、ゝ、崇德院、天永元年十月、擬中納言、師頼、
より和して、松樹久緑、ゝ、歌、ゝ、宸宴、
ゝ、順德院、建保六年八月、右大臣、菅原朝臣、光雨
筆寺
関白より和して、池月久明、ゝ、歌、ゝ、海
せ、ゝ、後鳥羽院、元德二年二月、擬中納言、右定
卿より和して、花、賞、春、ゝ、歌、ゝ、中殿、
遊、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、建保二年四月、土御門、建
武二年四月、清涼殿、和歌宴、ゝ、初度、
ゝ、ゝ、ゝ、中殿、先、ゝ、ゝ、

代々天皇・上皇・摂政・関白・大臣・大将・内大臣・中納言・参議・侍従・殿上人・諸大夫・侍・武士・雲客・女房・官人・僧侶・山伏・神官・陰陽師・医師・絵師・楽人・舞人・相撲人・力士・番人・下人・牛飼・雑色・小舎人・童・下女・下男・牛車・輦車・轜車・随身・牛・馬・鷹・犬・猫・鳥・獣・魚・虫・草・木・花・紅葉・雪・月・日・星・雲・風・雨・雷・鳴神・霞・霧・露・霜・氷・雪・雨・雲・月・日・星

（…）・頃日より…ゆるされ…・法印まいりの…実
白い今朝より出座より参候ところ・右大臣内大臣方
ともに出衣始め・又別に関白出座より…の列
…・内大臣以下…・今日出仕始・終て保安
の例よりて出座ら出衣始の事・前駆布
袴・随身袴別紙の…・…別…の日将軍参
…・…・…の別紙・…人めを…と…
…・為秀・行忠・實綱・為邦・朝長・…
よつて通…
…の事・左馬頭陣…より参入・
一番
行列

左侍従大納言二番左馬頭時秀　北白西宮金派のしくよて四目結とした紅の腰ゆるされ金作の太刀
右少将二番右衛尉資信　北白川殿きしの西宮白しくよて二ゆるされ白太刀
二番
左行勝七郎左衛門尉貞信　北白西宮黄腰ゆるして白太刀
右武藤三郎左衛門尉清長　北白川殿二すちの中より白腰ゆるして黄腰ゆるされ作の太刀
三番
左大内修理亮詮弘　北白の西宮黄腰白腰金ゆるして大黄とした
右大内七郎詮長　北白川殿きしの西宮ゆるされ黄しくゆるされ作の太刀
四番
左海老名七郎左衛門尉詮季　北白川殿茶染の西宮黄腰ゆるして大きこと黄腰白太刀
右中間左衛門左衛門尉蔵景　北白川殿きしの西宮金派の腰ゆるして目結とす紅のこし白太刀

五番

左 山城四郎左衛門尉師政（地白直垂 白絵まて すの うとかく 白太刀）

右 栗飯原彈正左衛門尉清国（地白直垂 白絵みず とうし 黄絵にて 梶とうく 脇黄 薄大帷 白太刀）

建久暦仁より・虎皮の尾鞘とて・しけるまや・しるもい
ひかく白太刀ずや・次に大樹・（常の直衣うすき 文の ゆり ぬり 指貫 うれ おり うちうち うらぬ ぬいうす）
左のかたうちに山名氏 右 山城 氏信（山名 氏 うり うらぬ これ 太刀 ひり ひ 紅 の きしぬこ）
次に・右のうちに 梶原 掃部 以 能直（赤 おとの ぬり ぬの うり 衣 うす）
あのすしぬこ 皆のやく・うに 沒 乃 如 うに 小 侍 衆 左 番
左番 尉 言久（二重の うり 衣）調 家 政・幸 郷 左 迫 太 夫 将 監 清 泰
うちの 政 の 立 ぬ の う・以 外 直 宮 の 中 ぬ の う 淵 ・ あい
ち ち に・今 川 伊 豫 守 貞 世 侍 所 ・ 以 警 固 と ら も

あまりる・又ち政 伊豫守 高氏・山城中務 大輔 行元・赤松
判官 光範（白直垂 白太帷 白太刀 烏帽子 下 袴四人 名負）佐々木 尾張守 高秀 伝・安東
信濃 ち 高泰・曽我 兼 濃 ち 氏 助・小 馬 掃 部 助 清 重・
外 宮 小 次 郎 清 盛・同 又 次 郎 ち 繁・長 沼 新 蔵 尉 秀
光・藤 氏 郎（ちとの 宮 時）・亟 成 明・屋 代 新 蔵 人 師 国・佐 脇 太 郎 光 直
明 秀・葉 科 新 左 衛 門 尉 家 治・中 馬 源 二 郎 家 信・浅
藤 伊 勢 ち・久 下 筑 前 守・濱 名 左 京 亮 清 政・萩 野 出
羽 ち 宮 光・長 次 郎 掃 地 山 城 守・波 多 野 右 雲 ち 左 に
ち ち 西 宮 ち ち・北 条 ち い ち く 方 見 形 ち つ
さて・次 ち 不 同 よ 去 ち 仕 ち 地・計 度 俄 ち 参 仕 の ち
司 職 の 時 ち 海 ち 大 紋 ち の 慶 と 参 ち 仕・又 西 衣 始 乃

御所〳〵・建久頃実大大将殿〻参内の例に准〻て、
おなじかるべきと思召〻れて、常盤殿を召具せ〻られ
ぬ〻、其後御所〻〻、又おなじ建久麿仁の例に
〻て、紅梅の直衣を被せ〻られ〻るや、大樹堂上
のうち、殿人等乃中門のあなたに、敷皮を敷て列居を先
別和殿〻〻て御前の召のう、関白御参内候せらる、刻
張ないもうて人〻厳しみつく、太大臣内大臣按察実俊
義中納言時光冷泉中納言為秀別当宰相侍従宰相
行忠小倉前宰相中将実名二條参宰相為忠富小路
前宰相中将資名右兵衛督為定兄弟少〻侍臣の列
より御所の内まで参り、関白奉行の職なり、仲光朝臣

召て事の趣を奏ふとて、やうて出御 内侍所をけ出衣おりそなまいのう、
関白出迎申給ふ、次頭左中弁職房朝臣を先し、
石山寺座主〻〻を作て、職房朝臣殿上より
卿とめ〻て、右大臣内大臣以下次第に召座、大樹公殿
上より召座を〻〻て、座主より法勝寺の座を進ぜ〻、法卿を
〻〻座を〻〻のうち、関白仲光を召て、切紙を
つ〻て中院作を、仲光朝臣を召て、切紙を
作頭少と持て隠て、法座殿上人
綱を召て、久座を動へらし中を作を、職房朝臣出て
法勝寺すみて、法座の御硯箱乃蓋を召て、
御手を動て書〻〻、又仲光を召て、座を〻〻

中と作て・行頭、讀師 為定 菅原懐国 講師 為定 二人為定と書て
御所の方に向て居て・次に殿上人ら次第に懐紙
を見・殿人懐国を見て
うたをよむ・仲光為有 朝臣 為重 朝臣 行藤
朝臣 為冬 次第に也 次に公卿下臈ら又也
をよむ・右兵衛督 沙弥 為忠 卿個 建保 宣房 殿上人 冨小路前宰相
中將・二條黄宰相・小倉黄宰相中將・桜察 内大臣
右大臣 関白 懐紙乃見 藤 行かと 乱れをよむ
也・関白は建保乃例よりて・序を書いへしと
位次は由を見て見をよむ・又直衣ゆみをみ懐紙
為太閤 元徳・中殿 沙弥 作法 法 式 作法 法 式 大樹

本座 并 沙弥 みて懐紙をとる・其作法優美の
事・人々一同に感賞乃色あり・右大臣 讀師 為定
らて・すくに沙弥 沙弥 乃 命定 に 次右大臣 講師
仲光 をよむ・沙弥の命定 すみをよむ・次講頌乃人と
序と諸 別和 為秀卿 為光卿 為忠
卿 為遠卿 乃也・又行 補 為重 為邦 等 朝臣 め
しをよらて黄ゑ・すくみをよむ・次右大臣 為重 朝臣
に 讀師 懐紙 をよむ・序ら次第に
文墓乃上に 乃 をよむ・仲光 をよむ・人々講頌
序は三反 ら 乃 ら と講を・関白歌五反披講 乃也
次殿上人ら公卿 ら て・次第に 也 と講 を 終 公

卿二位・大樹亜相なども、文をかりこしと海と信
下京拔後にして、講讀師みれもせく、海頌人と
い狂候をゝ、こも関白芸と作せ、天気よりて関白海（恒久接ぎ讀ます）
師の家庭よりすみつきて、沙乳をとらかいて時光にと
名て、沙製海師とて、今日為家卿為世卿
ゆよりて、別勅よて時光に先きる唐油貴度く
の沙製の海師、いかゝ哥人なりしも、其
倒れ行に成なり、関白沙製と給て、文書のとも
記録をとく、人々海頌十反くの事ゆとく、すてゆ
ものもしるなりしも、その多のいりゆたみて、
巻のかりをなりしく、みすみなきすきいゆ

えんかるゆ、人々涙奇乃参、雪井ゆるる紙しく、
身よりしはらくをらえ〜、沙製海にらえ、
吾和庭ゆきりせく、関白沙製と問て、文書のよ
をして和庭ゆきりせく、沙製を懐中の例し
いれしは以ゆこの日
給人よりの
らるる人々、涙ゆ庭と
庭と言う、関白人い狂庭ゆ作せ毎、次ゆ沙製の
ゆりゆ、まり実白仲光とめして、親奥と微せ
ゆと作せ、殿上五位六位とて乃役人参て、切紙書
ゆ庭浅取てきりせく、次翁房朝臣とて、文書と
らく人を中と作せ、翁房形臣沙製よすみて沙製を
懐中して、沙硯蓋と和てとのとく御硯ゆ和て、

臣下の家にもとゆるして去らせく。俗人二條大納言実綱（源ノ）笛左宰相中將実継琴前兵部卿藤原宗尹前太兵衛督実綱少将三位成賢（柳ノ）公全朝臣等宗泰朝臣（甘露寺）女人簧ゐよ弾せ。次管絃の奥を弾く。先副房朝臣御笛の笛を持て。関白の九の子のごとく。関白笛をなて簧をうちすみて。御子より初て去らせく。次伊豫朝臣笛笛を持て関白の前のごとく。次基隆朝臣琵琶（後の大納言比巴也）弾ぜらる。右大臣乃子のごとく次和琴第六位藤人懐風言長光と。次関白笛笛を取らる。次々御子より始殿鳥破序田舞急。緒ゑ伊勢守万歳楽三臺急。法

拍子にうつて関白御笛笛と弾て。副房朝臣と舞見と。是一拍子。ゑとの後人殿上五位六位参て。うつしとのとうて退て後ゑ入御。四日年刻は。うしみとにたらく。人々まゐり。御殿遊乃例よりて。禄乃ものし。松中殿宴ゑ。主上御和歌作る事い。遊近の後て。はるゑ。建保ゑ。はる琵琶ゑて。そのし。武御代詩哥舞乃宴宴。大方四つ加しふ。立先。しゑ。ものしの御和歌。玉笛の義。中ゑ。風凰。朱鳥。（和琴ゑ。の間ゑ）御神楽。御遊。はんと義。義作。中殿の宴。中古。朱和ゑ。六七度義作。武立い。方ゑ。ゑを引れぬ。い。義

神武天皇紀道臣命・四腕彼津乃命紀風と
ゆうくなる・人うれ拓かれ遠世と慕ふのみ
世の民・世を治て柳葉の新芽とうんたとえ
ゆれ・光松方と清して栄よ・伊勢の国
つるれ綾よ・ゆうきしも・成成遠徳の徒例よ
かて・関白ゆとなすもうれ結ると・結ふへうも
ものうらうらうし

白鷹記

凡鷹者瑞光之精氣とあるへし・鐘岱の壇象
よりまれから・春過ぎるを伝ふ・秋戮と引い義也・

同

食をるを以とわすれをるを敬也・誠をる小強をる
さる勇かう・遠とをる見る智也・武五常と為て・
皮衆呼と童ふ我朝仁徳天皇・とす野の御事
ゆうしう・代々帝・庁野・禁野の特・宮田芹河
の道遠絶ることなし・就中・寛平宮滝の御事・
勝負の御狩の儀式・北野天神うしと去るる未
代鷹の無読ものや・毎月左右の近衛・西園の名
うれをとめて書る・大内の名の書司よ・数聯の良
鷹とつかうれ・数年の遠犬とういと的・毎屋の大宴
ふ・上客料理とあすもて・茶延とわるうれ・法園の
使い・驛路の鈴法かうして・羅振の設と催を・志うの

かゝと・野寺の境乳と号・恋の奥こゝの北みまうしあり。
ゆゝ一つ山乃牧のうとゝ也・とゝ野の原の雪の沼とゝ
ゆゝ・田猟の遊無と催ふたとゝ中れ・拓上古の
名鷹い・天智天皇の御鷹野寺・延喜聖主の白兎鷹・
一條院の鳩屋赤目みきこ原より小一條院の鞘巻鷹
山城等也・近代世稱せる奇鷹也・愛よ伝伝国称
津の神宇佐る所の白鷹・其の相鷹経よ如なるの
みなり・その毛色一段也・ゆゑに楚国の鵬とれ
とせる良鷹よりなり・首頸白綿ゆゑ也・ゆゑ
羽毛い理綾とゆせるゆゑ
遠くてい羽毛すくれ・前ゆむくい股のみ見て羽翼

尺くと・其の年齢のうち・いくゆ記よりて中ゆく
目光明星よ似ゆ・眼うこゝたくして人よ對ゆ・うん
愁毛白糸のうち・目の下の毛黒くゆ
ゆ・鼻のゆ分明ゆく・口わかゝに・ちうちう毎
ゆ・頭のつく拔出ゆ・眉記く
して方よ・ひゆの毛ゆく・うしとうれ
毛綾とゆめ出・てゆ毛うち羽ゆ・脇記
ゆうこゝ・一の羽つい毛ゆ・二の羽ついすしゆく
い廣くして高とゆ・ゆゆ・ゆゆ毛ゆく
き衣の毛白綿ゆゆ・羽翼也・てとゆと
ゆ・去りとの背ゆ・とゆつくゆ毛れ・

くれなゐにして紅し。尾いやうに物よりこんぜんたる。
むくいのゆゑにきせまちけのしほ。ゐうちゝにおこさ。
只きぬよりきみかせう。腰をこやすまして是大よりして
凡ゐのくるかへて。をを凡うち凡高をくてこ拾
かうく大さかう。無して一枝の苔おんんのうゑゝお
今その数をくかし。又神仏御法能をくしかも年。
記をみいとゆあれ。百人一流をとみ。編素羽服を
勢さたとつて年れし。御ゆわりまの奇物他別の
異禽しをや。らして粗芦と記をとのこ

き夜乃神きめ

同

唐国ゆゑ行くきをとゆくし。我ゆ乃人を若らり秋ゆ
人をとをとるなゆ。ゆ凡い光源氏い。わゝゆ老ゆ
煙乃雲凡とおゆめ行へう。第系ゆ代を乃歌ゆ。御
ゆくをいまを法凡とゆるめゆくし。嘉ゆ千ゆ。
元ゆ凡まゆくゝゆる年いわゝ凡時乃ほこしき
ゆゆ凡と。秋のゝ凡の上ゆ。老の久いけよ思のゝく
行ゆ。長月廿日ゆをいとゆめゆし。ゝ枯ゆる萩の色
と。夜飛房の羽凡。ゆうゆのをめて所ゆ心ゆ凡
ををゆや。ゆゆめゆゆゆの行し凡ゆ拾ゆ。齢乃
数ゆゝゆして。夜をゆ行ゆ凡ゆ。九孫乃花
と。ゆをゆをまゆめ凡まをる蟬を。ゆ世乃年い。めのまへ乃

衣も、おなじ様なれども、やはらかにて、人の肌に、軽のほ乃香
こゝろとゆるすべし。是をむかしの胡乃香、今とまさぬとのを
うし。ふるしと、人を恋しなつかしい。手とるもとらで、百乃色を
いとのつる音さへ、むかし今わかれをなげく涙よ二ツ
寒、食ものゝ味くらべ。いにしへ、ものゝ味を
めらしい。ふるしと人をのゝかいて、えもいはぬ味を
う。ゆちりはよもあれ、おもひ少し。はなはだ、ふるし
身をもせこまるいなる也。唐国も、文をまかい詩を
作り酒を造りなと。ふるしの人のくせなるなり。
楽天といひし人い、朝夕物をとゝのゝ
ばかりなるにてわるくらう記んの加み去ばしと、詩をも

作るなれ。ゆゑ、此物のみより、何とかくことの
このむ世なれ。さて、おもふ事をうたふ。わしかうこと
うく芸なり。代々の歌人、ものゝ
筆ものとさへ。源氏物語衣紋のよのまれ、ものゝ
作るなり。老の世まいもなりなる。うさ、ふるしと
里と、さるしの乃ゆよりなし。廣さ、ものゝ
よてもさへ作る。ほとの年よ。ものゝ
ものを作る仕せて。物語の記者とゝゝる年もなし。
数人乃とて、ものゝいとなる。三代集の中よりあに、いま
あ、ものさらめ作る年いにほくなり。まて日本記事
業集あ、ものゝ世乃文章と歌、国と

の境界とて、いや〻記氏の系をも、記されいのめ
多物なれい、よみとく事ふにしかく記しと所詮
云し人、日本記神代より門談のんを加記のうち、
仙覺といひしこの、美系のもの〻とえて、三百餘首順か
とうもしらみとかりる歌とくくを作り、光源氏を光
形といひし田舎人、水原抄五十巻と作くし、苦らの
雅文をも、おほくのうちをも、うれらの中にも、むうをし
まれる事いのれと教考のかるす
女のれ、佛神の作あすをもちて、一枝を作をす
えるを、おほく作る、芦いの為記業のかも、名をの
らうかうれ御門の出作れ、才よ事。

御門のうくみをもかり物り作れ、好鳥羽院好源院
なとの御代、弾よをうくかうくかかるうの物れ
れをも、おこをも記いるる義も、歌を作れい歌を
人の中にも、美系の男女の歌をもしかりしを作る
もかや、いと物はのうかるすの、後成定家乃家
のかも、をうの方系といをのをれるる義、作の
乃わうの雪月花、花の作りとおをもをもかと
又名をも人とは、美系をうを濃いうれかれ
好鳥羽院も、歌のうを初めくくを事、詠集をれ
と義作れ、源氏の物語かをも、これ作
いるくをみのれ人も、かれを、紫式部の源氏白氏の

文集・和歌集・源氏物語・清少納言枕草子・後撰集・源氏物語・源氏物語の
ごとく・後撰集・源氏物語・源氏物語・新古今・源氏物語・源氏物語・
源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
有まし記・源氏物語・順徳院の御記・源氏物語・源氏物語・源氏物語
なる・時うつり風変りて・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
歌よみの習ひなるべきよし・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
かく・まして連歌とつくること・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
色もいろ〳〵・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
国々にたえたれば・我朝は連歌の道・源氏物語・源氏物語・源氏物語
わるくなりぬ・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語

代まで・源氏物語・源氏物語・柿の本の庵と名付し・柿
の本の長者・源氏物語・源氏物語・源氏物語・厳重の事とせり・源氏物語
時・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
ある・源氏物語・日記・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
し・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語
・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語・源氏物語

まことに・奇の毒とそ・一向もすてられぬ・詩作る・人の・癖なり・猶・詩は
はなれ・難き・事なれ・されど・詩作る人の・癖なり・猶・詩は・
しかし・されど・歌をみるのも・歌を・みるなり・初学の・
者・非用なる・ものなり・されども・まことに・人の・
恵・歌にとられ・ぬ・事なり・猶・
詩しる・事も・すくなく・なる・ものなり・
と・いふ・ことは・なし・好・源氏・院の・時分・
歌の・ものも・判の・詞・如・されぬ・ものなり・記・者・家・
物語・なと・を・いとに・物・とって・詞の・花と・
なれ・しる・ことは・なし・歌の・ものやまと・ことの・かな・
よりて・なれ・しる・ものなり・是・はまた・ものなり・

庭訓の文とて・かいて・ある人・すくなく・判の・詞とて・おもふ・
まゝに・かゝれ・しる・事・なれ・されど・基・後・かは・
詩作りて・ものしる・は・ことに・後成・定家・者
歌・つまは・記・なく・学問・とて・なる・人・そ・ものし・歌の
判と・庭訓の・詞を・かきて・ふ・にて・なる・ものなり・
されば・今・い・歌道の・事を・ものし・ものは・
ものの・道・は・まて・いふ・かい・ものなり・判の・詞の
ものし・いと・いと・なる・ものなり・
ものし・ものは・なれ・ども・歌・ものし・
し・ものは・なれ・ども・歌・ものし・
ものし・ものは・なれ・ども・歌・ものし・

ゆるしむしろ見たこのみ紀伊の一門のと、いまこのみ
ゆるしたまへ。この世のしるしみな。うい世の後も捨ては
かり。一る牛蒡の多歌い。このいえ求めいるを詳しいのき。
茶屋の色見えるやうこの後は。伊勢物語を尋出して。茶
のいとなみ(なりまま)をしるつめて。かくみたてゝもし。うなむ
は。物これみの数も物をいかゝ。仕る。井戸中の
蛙の多をあのしみて。宮殿楼閣と思るゝもうを
しう。大鵬と以多の里と加きもし。きに紀
あんとて少めるかりかるるの。二三寸と飛し。きゝもの
あのしみ移り。年と加やトせは。ふむとかく
さめる幸い。ゆうをに石見なるや。あ。ま(て好)いよ

かこと。ものい。人よて仕るなり。わろかる家のうちのことを。
ゆのときいと思ふ。まもとの器なり。まもとをかく。
人をも世をもあきけ仕る。祖かり人と。このみりて。御門よ
し。ゆつせあく。是申ること。いまもかかるあよ。をかの
ことれこのみは物うく仕る。中代に医房邦綱かと。
人々は。うか。摂関大臣の家の門にい。いやしく人なり。
かやし。後い天下の主宰とかり。紀牧邦綱大納言は。
武家のまの神をも。むと(日我)仕てをかいきまる
廣えかといし人い。鞍馬牧かあとのみて。をしかよ。
藤倉の右大将。いと行くせて日本国の王位を
ものいよて。今の世日法皇地頭かと。をかしあると。

は人のゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ者ゝ者ゝ函ゝ
ゝ者ゝ者ゝ物ゝ母ゝ乃ゝ薩ゝ頂ゝ
人ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ

年もすくなかりし。されども何のくなることもなかりし。
世のことは警古をもつとめ給へり。庭園
乃文なども我国の日記なり。源氏物語
なども世の人白を黒くなし黒を白くなす
ものなり。縄とゝ黒の漆塗なりしにそこと赤く赤き
なるに。西とゝ西字とゝや。庭園
なり。周公旦とそ伊尹に位置
うしろ。御門をもつて。周公旦とそ伊尹乃二人
人乃。めでたき国とて。きめなりと。何れ乃二人
何りて。流云せられし。御門まるに思しめす。
去りとけられこと。その時西風何りく。草木
くて。茶木も如何去りなみ。秋乃田の実も換せ

うへ。周公旦成王の父。武王乃命にかゝるもとゝ。
世乃中をうり求めおりて。忠臣なりとそ。
思しめしかへまして。流参去りて。弟二人とも流参
られて。世はめでたくなりぬ。源氏の大将殿
徳母乃。皇后宮大臣なりとの。
なりし時。西風吹きて。世乃
しるは。安周公旦乃例と。
云。いうに如何さいかゝと。
なりしより。延喜の帝。時平乃大臣の流参より
宮。小野乃御宮も。西宮乃宮也。菅原乃右
大臣乃時は。桜原乃時。流云よりて。

損じて行くや。うたて哀なる。常時しの世をすぐる
死後して行くなり。人の心のうるはしい。何ぞ徳行
よそほうと。かや。人をのしるいまて。考へくらべ
らうて。哀のけちめ。のるは。常に事なれと。あんの
ふくよ。ゆえてうらうと。哀こと。ものを行るよい
あきまうらこと。ゆめ。ゆうの。処理かと。ふう事より
なきもい。ゆめ。生涯はうあまりて。ゆうまし。ゆうあ
国の政のたのいて。仏神の御心をかなふはしるい
ゆえにかと。かれ行(求よ)哀。加留(る)の事。ゆうて
うはうとなるれとも。心ねぬれと。よてこんよるあ
ふれ行ぬ事。孤狸なと。人とのも。哀れと考う

行れい。のやまちのなること。行る哀(る)せ
人の世のなるい。若利思ふ。ゆえ事いかゝ。寶ほし
く。官位しゆうしく行れと。それ行ると。のはふ
人ほし行いきやうなると。事は常の習。うれし
とて。まきしき。ふうこと。ほ処理よいあて。陸
かうみ花ほくものとそ。ものいゆ。ふうよ大罪
みて行(て)。盗人れとくとの。我力。まて哀れ
世とそかるの有(て)。加留(る)れん。堅い。怠よ国
とも人とも損じ行(て)。れい。ふうもの。哀と。ふる
へきや。世の事よい。ゆえに。欲しかく。君臣のなるす
はのるまうれも。うとうふらいあんへ

りはまとの仕かう事にて、何のまゝにしたい、情深厚者
母はなくて、ちゝとなる（況や老て居る）ちゝてまゝ
人の恩をも忘れ、不義を思ふなる事のみ、世の出場
あれほく居るゆへ、信たりて君をかゝ母をこゝとして
又とかやまた祖の事いふれつゝ孫よりかゝる事のみは
ト母及ばぬ上とかゝるゝ、とのまとりさをするぬく
むのみ、れほく居るゆへ、大なる悪と思ひ居るは
多敵母おとり居るとて、ゝかゝしあるゝ抵悪成
敵多事おほゝ、人とゝていゝてゝ思ひ居るゆ
ゝる（こ）昔韓信とつゝいしゝ人、わゝをていゝのをまく
まゝかゝまゝは、弱かとゝて居るゝゝゆへ、浦人の

衆へ引出まゝに、うゝ（よのをみ信）ゝるゝをて、ゝかゝ
ゝてかゝゝゝゝる母、韓信母洗川母めゝ、ゝゝ
ゝて、国の管領かゝ母なりて、此海士の衆より引て、
ゝゝれ家ゝをまゝせて、考れんきゝと報きゝと
ゝゝに、浦人ゝゝは、あゝまつゝ此成のゝゝ
ゝゝゝ母ゝ母何ゝ、かゝの此悪と報きゝ（ゝは）ゝ
に思ゝて、家ゝとみかゝゝゝゝゝ韓信
ゝ一度のゝてかゝゝと、むゝいゝゝ思ゝゝ、まゝ浦人の
ゝゝゝゝ、誠ゝ母雖ゝあゝ母ゝ母ゝ、一般
ゝ、かゝゝゝゝむゝゝゝゝ事はこゝかゝ、此成の母ゝ、
我所のかゝゝゝ形は、ゝゝゝゝ、ゝゝゝ

を学ばずして、学ぶべきの日を待て、学ぶとしたの
ばの根柢なすべき人は、学問をよめくみ給へ、
学びて、聖人は警古をしる、学ぶべきの道をしる
事まで、学ばず、学びそしらず、人の学ばざるを
ゆへにいふ、学ばざるを学ばざるは、わが学ばかくの如
庵の文五経三史なりとて、聖人をとりめとして、聖人をの
学をとりなるゆへは、学問人のなり、学ばざるとも
をしへなし、今学ぶ事のしるし、この
文なりと見るべき人のあり、学ばざる如房なる
学問人なりとのあり、学ばざるとも聖
人をとし、是は歌よりあるとは麟・鳳・龜・龍
風凰のごとく、すべて世をみる事のかくのごとく、今学ぶ
人もあるまじく、学ばざるにしてもよき世、
堯舜文禹殷湯文王武王、周公且孔子なりとなりは
学ばずして、世をゆるす人なり、
学ばざる学問なり、世をゆるす人なり
国よし、聖徳太子、大師なりとなりて、我
む、聖人とし、祖の人は、学ばざる事なり、天
地と人作りとなりて、日月と徳をかゝる祖の
事なり、とかくとに及ばず、恩ばかりなぬ事、いとふ
学わをなり、言葉なり、学ばざる人なり、
学ぶ事なるまじく、学ばざる人なり、

この御よいみ〜くもかりぬれば、始めて始いんにて
きこゆる事なれば、虚空蔵を始め奉り、
御門の位みつこしなれば、あまねく世の人と共に
世をもめぐみ給ふ事なれば、御ものがたりも、
わすれぬと言葉ばかりなれば、尚時の人は、始めてとうんぬ
なることなれば、かくもきいかくほどなれば、大方天下
よりも大臣公卿下りてまうして、その位よりのる禄の
ものしをのみ法とこそ、教恩かとたふ事いかし、
さるべきことなれば、振るも枝葉ばかり
あるべきに、常あわれなることなれば、
下の御ものる事、始まれる事なれば、いかにもとかれ

事なれば、まつりごとの事は、うれらるて、なるべく、又と
ものの道とて、さくのうめの花をかり、男はいかほども
警古者なれば、ものしの人、僧たちいかもかいきやう清僧
濃ものしたちとかしの人、その御ほうは、謡歌笑絃よりも
なし。たゞ常みたまつ賢人、君のものの係とこそ、
たる人とはよりなめ、たれたる今は、なほ〜ふるき、
家々見て、なれ、賢人家々の位よりの程の人と、文々
我才と又物と思ふ事は、一つの人、次、むとに國の多
めにんとくめず、その御ほうの人と聞かり、又者
しるとて、何の記事とうかがいかくらて
なりまして、なるとなかく次第も何まれ絶

道理といふ事をもとゝいたく如何顔をなくとこか
むく・世を去りめくとめくむらをかのぼいふ文の
ゝくるに・君は何つめ親とうゆゑ
身をゝ・朋友の義とみるに・君をえい・何にを
とて・恵何のるゝのは貴し・神を主のと罪をも
みれその分際よたうゆゑまに・名利とこのまに
財宝とをとくせを・ゝるに国のゆかい・賢人君
子也・金玉の類と既事かし・かやうのむ人八・貴
者も君をもいらるに仕るゝ・ゝるや・ゝる程の事も
今の世のは逃くいるまし・ゝるい・ゆをもてるの人の
ちと仏神をもふけ・国をも長をも助け・ゝるのみ

我所とゆふをもて・財賄をんゝんよ物をす・家
門のゝを道理とゝをとゝて・私のをゝむと
今の世のは逃ゝるに人をもゝ・大方三皇の代よ
ゆゑ程わるふ人とは・中古はゝに人をなり・中古よ
わるに人とは・末の世のはまゝるに人をそ何
へしと・唐国のゝをもゝみ・ゝ・かゝるにのみをを
ゆふ世に人いるゝなり少むと・れをて仕るに政
らゝて国のにる時は・まゝをゝてむうゝと・あゝ
五百年の内のゝゝを・五百年に一ゝい・聖人はゝ仕る
ゝやゝ出ゝて・内のはるを時をゝいゝゝゝゝを
ゝる・まゝ学いみゝゝて・唐大和の事を知るゝ

世風よりてんのうをはじめまいらせ給ふ。あと
ゑなどにも考へぬ人よりてのうとなし。とのたちは
ものしれ。学文考へうとて。いまは学問のうち
は理を世むきのものしれんの人とハ学文せぬ人と
へ。ことなる。孔子も仰られし。少系時改よ。九代
あとちかの事しらへて古学のすたれもの事は
おううしまや。わたくしに負観政要。御式條なとい
ふ物をかうと学て。私かくこのいたし様をす
へて世に出たるも。国しめてあるもいたし。わたくう
かの家の中とこれをもいたしむすたもとうす。
まして日本国の事と。ひらくいたむ様の事は。

国のうちにくのうかやうとも。撰ぶ人のうかやうとも。わ
うとの事ものもまきとかくし。わるいのほ
ひとを。古記人はうとをかるもの。人のうちは諫た
として。常よわるふ事とよいたる人のうち。何らとめて
ものを事よりて。たくさん。菜ちにのうしなて。常に才と専
く。妻いのまらしもいはるは痛とかたむしてのかし
らに帯は。ものの諫言と関て。ものの人と教へ行て。賞罰
のしし。ひらかうて。武家の人は。いかもくに事すれも。
我分よりものうの事とは。わるうの事のふも。
ものよりものの事とし。ひとたくかのいきの
くは。ものわるものをいたして。上へて国の

あめし・その者ども・いろへ
御ん仕ものゝ・二心なく
世のためとかりけんまつ人
かり・きん人のうちに・
を御ら・いまは人間をこと
くかとも・世をも・のきを
とゝ御門の・羅とかり・
けをく・重極ん人にて
きしも・重人にかの
人の・ものとらの
のまゝ・うへ位

被仰付ものの
ものは・
役をて下の人の利根者
なり。

也。かゝる人のあるも・なき世を
なをしたる・のまれよりは
女房の立を聞をゝ仕る
わるに・内は親よ者ども・
とはるに者ども・
り見る・いろ程も
見ども・大ゝ
日本国に・
初出して女の
なる人を国
の中・天照大神に女殿よりてわゝせ
后と仕ゝ八幡大菩薩の御母よて・わゝせ
給ふ・新羅百済と
国をたゝ
ゝ・をゝ
強ゝ
右大将の小の方。

尼二位殿と二将軍の母とて、大ねの法い、むとよ強盛
なる願をおこし給へ〳〵成敗のうへは、源氏のみなもと
断し、世二位殿の御ために、義時し諸大名をいかゝ勿
せんとしつゝ、ひるんかとて、のれたりと、世に申し、昔
女房の御門乃、かゝこくわるゝ世をおほくは
しる、今し聞ことにうつゝこゝろん人乃のこい世をまつ
とこゝろうへ、ゆ事なり、又男女乃中いろ〳〵事とい、
元原氏にこまるに、ゆ結乃ものとなる事と
毎夜乃ちかりとめ、ちろ結ゝ世をし仏花を
まうもん人とを、いへらしちりとめて、ゆことの
ちうへと去結ゝ、かるとしと、ゆ男も

かし、うりゝ都を、直に夜明とかんらは何
ゆし、うつゝゆよて結ゝまや去ゝ世をくゝ人乃を
いかえゝんとわるまへ、うるかゝとゆ、ゆ
道理とゝゆ、ゆ、ゆ、

ゝて、牛の血とのみて起請かとの由に契約せゝ
今し一撥なりとも、かゝることにや、大くに君よは比
きたれる、こゝに人は臺とゝもあるを牛ゝ向まゝ記之、庭
面も、玉のうたゝ時、牛の血なりとそのゝ
ゆや、三皇五帝なりせれ、乃る牛もゝ向し義
を、て、ゝ、ゝとのみ向ゝて、私の一きかをは、
こゝをもゝ牛の、ゝ人ゝ比をて、わちさをの、向ゝ
まゝてたゝとゝもて、こゝに牛をもゝ向ゝかをする
牛ゝ、返ゝ向ゝ記をかゝ、盟とゝ、ゝ、ゝ、合義
乃時のわをて向ゝ、今ゝ乃ゝ乃時は、一きし
乃ゝ向ゝ、ゝ牛ゝ乃ゝ牛ゝ、乃ゝ牛ゝ時、私ゝ

契約は、洛の記牛ゝを記ほを、拓を記彼風乃記
ゝ向ゝ、ゝ向ゝ、ゝ、今は人の風まて、ゝ、ゝ
ゝとゝ記ゝ、ゝ、ゝ時ゝなりぬ、彼漢高三人乃ゝ
ゝ、ゝ記ゝは、ゝ、ゝ記ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ乃時
とゝ記、ゝ、ゝ記ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ記御ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、

同

君乃君なるし賢哲世界に名を揚げ、忠孝と
先と尚しかなる。されど先祖の厚恩に報ひ、
福福門なり。幸に拙者よりは、ひとへに才能鬢膚
と父母よりうけて、世よりの常の道とうかがひたん。ひ
れと人の心用うるに、なるべきもの。
浮世を思ひとて山林に隠れ、世を遠ざかる。
この世に憂ひ初の生死を断絶して、かかる三途の業
因に陥ぬるは、情なきなり。世に出よりこれ
なるべし。志ふかしとは紀綱に陥りて、所詮
君と生きめしと知らるべし。能く生のはうをとめて

生べし。君は父子の道を先とし、拙者は才能を媒と
して、官禄の運を初とへ。古今の風とうけて、
其業乃業とつべし。されど清代と習ひ、官班登用の
月俸吏のごとき人い、滅亡の数乃栗梅なり。拙
者といふは、異天の恩をとのこい。寒天の恵といふ者
たるい。又抽賞よりもし。ふくのうをくらす身。
主免のれうあらば、拙者は世にてもか
とう国城の責とのふきたん。先人にて命と考と
のもの初へ、とのふと恨とし。
命と考ふと振へ、ひとへに又其上の才の生

渡を案立し、毋と人と共に其の年月を
教密に為の人へ武士書を
乃ち其の年少う真名
とうしかふ乃ち志を
いうく乃ち為して教延の
うしとみかを年々講代
又徒行と先と廣也
ほく侍り侍り人臣の
略も一心を
時習かり時流人の
ひとれ或し命ある

天と恵・或ふ伝脇恵ある事を志をして・神徒乃ち
ひるをとわかをへとして・世俗しみ人と為ん・或
恵の志のいとひるを
石恵石要して・宦官乃ち不足ある中と為く
れをいい・俗を理殺を
乃ち人を中を
みを世をを
由をん・其地党乃ち
く思恵を・仏神
いうを者を徒
教の要極を家の人・

抽賞財物いのち・まことに院内の侍人よりと用ゐなく
者し・とのゐと云者をも召る計墨と云・紙と葉と云と
へ云事なし・先何の中世てとも不藏とゝろて・此成
東と以へ出し・好よりなをく彩毒を多く減る者
とゝ多く集りへし・或ゝ或し風月・和歌乃玉管
絃・蹴鞠乃新藝よりて出て・さて多く不乃不能
むゝけをへし・去ゝ宣旨文盲なる輩し・
彩家と輔佐して・宣旨乃若とあゝたり・古今を
例多し・うゝしむゝよ千年の形治をうして・家と
化う者多得・法ゝうゝをたゝよ・人心を
し敬信し忠貞と・去乃二とおへゝた・神よ仕へ私ゝゝ

新彩の心と中よ蓄もし神ゝゝ・君よたゝ
ゝゝし・福を祈ゝし・不出底よ・ゝゝ忠し
ゝゝ・ゝゝ・去実よ神をし君をし・ものみ多く
し・ゝゝ・ゝゝよ所と恩法を奉仕ゝ・ものゝ
法中よ数多ゝ・ゝゝ・ゝゝ人間と去の
ゝてゝ去・法道と云ゝ・中宮よ四季を多く成
ゝゝ勤節をなまは・去て真法法のゝゝ
去へゝ・君父よ法ゝ・去又ゝ・先者よは
ゝと去ゝ・ゝと去ゝ・ゝ去ゝ
不藏しみゝ国の去ゝ・者の去ゝ・法ゝ
ゝ不乃忠功し・ゝ者ゝ者ゝ・ゝ

出ずして世を過すべきかの心なり。和田義盛、君の
御恩に報ぜんと思ひ、又後に
と憂ひ、その媚をしたためて、
臣合御の後を深くして、我再国に帰
ることを願へり。如何ぞ、君
分とおもひ、この心ばせ愛ずべきかな。
賞をとらしむべし。
宋代の常の習ひ、而して
ひて、仁操をおきめて
上の財所の物の
煙を去ることを
かるかり。されども又云きこめしこと云ふ事
内外の安堵をもはかる。底仁操をまもる人
とこの心をもつて、
ひ。まことに其益ひ、
後ひ。後ひ我
又何ゆゑ付てと。
物語而能々
くして。十日を人日といふ。
すむことをもつて、
必人の上といふ
習練をへて。人の不忠不

思ひいて・奉云ふる母との御はかり事と立ぬ
賞罰のかなしい君のいのちかかるきはかりにて
ぜて居ることなんや・侍人の業をみて法を
恐・不仕とみていかに勤のあるを
ひいきをかいこ・何かいわるかつて・等倫の
を退我をすもるかうちとなることかり・かゝ
ゆ心深く考ふ法てしくし・三年の勤労かて十四
ゆ・のるべし・一日の法を免し名年の功をくし
らしと君父の恩かかる・うた仏神ゆ法と人命も
又かくのこと・不信の念仏念法し・一生頭地を
挙ても・遂ゆを考ふ知し・其実れ稽古と・一切メ

十部ゆ迄生ぬいて・仏法ゆ是ぬ如し学の法も又然
し・ちり思ふ思ふ・いかに・乃賢れ・て・君と
ゆ生を国をおけるる業用ゆ者ゆ・皆幼少ゆ年
ちりんゆ・一段ゆ・国家ゆ家ゆ・家ゆ
朋友ゆ・ちりとて・非をとう和ゆ雲きい・成仏
情ゆくみゆて・重職ゆ居し・遂ゆ国統ゆ考ふ
芒い教ゆ・庭ちて・ゆ・ゆかしく・一家中ゆ
以不ちゆ・ゆ・ゆ・

しと思へんをとつれしし・志て誠の志にみしの事
家つをしかるまこと文のいとまてい矢
と補て家とたきやんと思へ・人間をしくあ
しくて知をく・後よしとおもひ・志をきたし
し不藝・不能・邪なぬりんと思へらう不い之才の
才略のる通うた・実実い才学芸能も皆こうたるす
なり・手才不義なりし・才学いらく悪用とす・主人用
を知ぎれい・不藝しを・家産一人の
分の法法いなり・一人の分の不作いなりと為て
を・て所業の不感し・学問の学問の稽古
一人なるを・古人・恪勤の徒を・の為て四・井子

人情四を・て・志勤を存る者・井二は不藝は義
義をうけて・手能能は技る者・井三は昼夜恪勤に
うめた・節厚く養は技る者・第四は文学風月新
藝は達る者・第五は倩人を抱る者・人とは能
者・井六は物は拾て飢寒を救者・是を六四は
分ち・仕事・又云第一は忠かくして悪とはそしる者・第
二は主のを・と者をして世をとをむる者・第三は芸量
不堪なして芸倫をいとむる者・第四は堪忍なりかくして
物をあるに人情急分る者・第五は不潔なして義を
知者・聖賢とこの人者・主人を六形は分をく
仕事・ならてし仕事をうこの人・世の風俗を分る政

礼神・祝儀のかたちのみ
まで・始る所西新礼こそ
ゆゝしと礼世なるまゝ
と云めとなるゝ・ら礼
ふそむこと仕るまや・文
て何そい・武と習へこと
ゝ礼ゝ・累祖の舊法をわすれて・手身と
なるほゝ仕なり・或し勢列ましまして・才能い
高い身ふ・業と・身ふ官位と常ゝ礼ゝ・人ふ
遁世と表ゝ人とみゝり・名ふ名利と光ふ・喝
道・禄律の作信ゝ・ゝ世ふ法衣と思ゝ・ゝ

日ふ奥食と宗ゝ・人ふ女犯ときゝ・ゝ
の物と奪取て書ふとゝ・ゝ・又禄律の比丘尼数
数ふ・武射芸・すべて芸とみる・頼政ゝ射ゝ・鶴
の子ゝ・祢ふ・ふ何ゝ・ゝ蛇ふ何ゝ・狐礼・狐
ふ極ゝ・人何ゝ・ゝ人いそう武事と知ゝ・ゝ
聖王賞罰と・ゝ・ゝ・頼政忠盛ゝ・ゝ
天下自泰平の治と・ゝ・ゝ

菟玖波集序

同

大和ふとの業ふ・天地ふ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ早振・神
代ふ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・人礼去ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ

ぶつの文字のうちにはいる。風騒比興雅頌法
六らをとわうら。長短旋頭混本乃。ちまきのすうと
定めしうち。おとと葉の花をとあるとい。ねといの歌ぶ
とをとをとをと

ゐ[illegible]ゐ・ゐのつめらゐめ[illegible]すくかく・ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ
華・かゐとき[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ
風にきまり・柳営[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ
とゐめくみゐゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ
ゐゐゐ

元まで[illegible]をかくしてかくしてをかくしとうかくしをせと
みをかくしこのまきをうしろにみをのるをみをかくしふ
ちしをかくしたる君し宿し船と合せ・あをよのる秋と仕
うしと[illegible]・于時文永五年三月五日・書し
をををを